

小栗まつりは 5月26日(日)

◆命日は慶応四年^{うるう}閏四月六日=西暦5月27日
です)

◆ことしは小栗上野介父子主従の非命没後
145年(146回忌)です。

午前 倉渕小学校で

10:00~ 歿後145年 式典

10:30~12:00 記念講演

近代日本は横須賀造船所から

横須賀開国史研究会長 山本 詔一

午後 東善寺で

12:00~12:30 紙芝居「小栗上野介の生涯」

13:00~ 墓前祭 墓参と献香

13:30~ 記念演奏会 群馬マンドリン楽団

◆小栗上野介の情報がいろいろあります

小栗のまなざし

作曲
福田洋介



◇福田洋介氏による吹奏楽曲「小栗のまなざし—小栗上野介公に捧ぐ—」が完成して東善寺に届けられ、倉渕中学校の吹奏楽部が練習を開始しました。

◇作曲者の福田洋介氏は、1975年生まれ、東京都出身。11歳からコンピューターで作曲を始め、独学で音楽活動に入りたくさんの作曲や編曲を手がけています。吹奏楽のための「風之舞」は第14回朝日作曲賞を受賞して、2004年度全日本吹奏楽コンクール課題曲として全国の吹奏楽部で演奏されました。

◇倉渕中学吹奏楽部がことしの小栗まつりでご披露できるのですが、完成後の練習期間が短いので、プログラムには組み込まれていません。当日飛び入り参加でご披露できるか…!?

予告



▲昨年の屋市風景

屋市

午前11時ころから境内にはたくさんのお店が出て、倉渕および小栗上野介関連の土地の物産を即売します。簡単な食事もできます。小栗上野介と幕末の歴史ファンの楽しい出会いの場となっています。

◇横須賀の海軍カレー・広島海軍コーヒー・手打ちソバ・マス塩焼き・焼き鳥・地酒・ビール・まんじゅう・漬物・小栗公モナカ・小栗幕末関連書籍・ダンゴ・梅干し・陶芸・など
ナメコ汁・甘茶は無料

講師 山本 詔一 氏

横須賀開国史研究会長・江戸時代に先祖が信州から出て書店を始めた金文堂書店の店主(浦賀)

著書『ヨコスカ会国物語』神奈川新聞社/『中島三郎助の生涯』

共著『横須賀教育史』『横須賀人物往来』『図説三浦半島』など



・「横須賀市に造船所を作ったのではない」—横須賀は造船所の建設が始まるまでは戸数わずか数十軒の海辺の一漁村。造船所が出来上がると町~市になった。初めから蒸気機関を原動力とする日本最初の総合工場として造船以外にもたくさんの種類の工業製品を生産し、日本産業革命の地となって全国に近代工業の種子を飛ばしました。富岡製糸場の建物は横須賀で建築を指導していた私人技師パスチャンが、私人技師たちの書いた仏語の設計図を読める横須賀の大工を引き連れて出張し、木骨レンガの建物を建設しました。

・横須賀造船所で行われた職工学校の^{こうしゃ}餐舎や、中島飛行機を創始した中島知久平が卒業した海軍機関学校などにおける人材育成の話も交え、近代日本のさきがけとなった造船所を語っていただきます。



小栗上野介の史跡を歩く会

対馬事件の史跡を訪ねる

◆1861（文久元）年、外国奉行となっていた小栗忠順はロシア軍艦が対馬に居座り続ける問題の状況把握で、対馬（長崎県）に派遣されました。その史跡を訪ねると…（2013平成25年2月）

露艦の停泊地・芋崎

▼文久元年2月から8月まで約半年間ロシア軍艦ポサドニク号が居座っていた芋崎浦（いもぎきうら）に、その歴史を示す石碑「文久元年 魯寇之跡」が建っている。林道に車を止めて、地元ガイド小松津代志氏の案内で1時間ほど歩いてたどり着く。要所に新しい指導致標があり助かった。



ロシア人の井戸が残る

▼芋崎の「魯寇之碑」の背後には当時ロシア人たちが掘った井戸が残っていて、いまでも水をたたえている。「英国が対馬を狙っているから、自分たちが守ってあげる。大砲も贈るから、食料、材木、人夫を提供してくれ」と、根拠地づくりを図った名残りの井戸である。



▶残された井戸

対馬沖海戦でリベンジ（報復）

▼そうはいつでも、対馬を去るときの小栗の心中は悔しさに満ちていたことだろう。「日本にも対抗できる軍艦があったら…」という思いが、造船所建設の持論を後押ししたことと思われる。そして、44年後に起きた日本海海戦でロシア艦隊を壊滅するまでに勝利できた現場がこの対馬沖。しかもその日は奇しくも小栗忠順の命日—5月27日（慶応4年閏4月6日）—という因縁までついている。泉下の小栗忠順公よ、もって瞑すべし…である。

講演会 村上泰賢

『幕末、対馬と日本の運命』2月11日午後 対馬交流センターで

建国記念日の講演として地元の歴史愛好家などおおぜいが幕末における小栗上野介と対馬の関わり、業績を聴いてくれました。



情報あれこれ

新刊

『小栗上野介忠順と幕末維新』

高橋徹著

岩波書店 2,900円+税

▽「小栗日記を読む—、という副題のとおり、昭和47年に刊行された『小栗日記』の小栗忠順自筆の日記を読んで、登場する人物や小栗の周囲に起こる事柄を推察、考察している。実は『小栗日記』は極めて簡潔な記述に終始していて、幕末の緊迫した時期に重要な人物が訪ねてきても「〇〇来たる、会い申し候」ほとんどこの一行で済ませているから、その会話や行動がまったくわかりにくい。そういった中で専門の歴史学の知見を生かしての考察は、参考になる。



▽本文中では「勘兵衛を藤七の息子が襲名…」としているが、『小栗日記』巻末付載の「村々役人願出取次留」に「権田村名主勘兵衛」p288 とあるように、日記中の勘兵衛は藤七の息子（勘十郎）ではなく、佐藤藤七のことであろう。

復刊予定

▽小栗上野介の再評価が高まり、昭和16年に発行された阿部道山著『小栗上野介正伝』が、復刊されるもようです。

露艦艦長ビリレフとの交渉不調

▼対馬藩では対応しきれないとの報告を受けた幕府の命を受け、5月7日、対馬に着いた小栗はビリレフに退去交渉をするが、のらりくらの回答で三回の交渉は不調に終わる。小栗は20日に離島して江戸へ戻り、「ロシアの上部機関と交渉すること。対馬藩の宗家は領地替えして、対馬は幕府直轄地とし、開港して各国に使わせる」案などを進言する。老中安藤信正はこれを取り上げず、英国公使オールコックに依頼して英艦を派遣して干渉してもらい、露艦の退去に至った。しかし小栗は「その策は前門の虎を追うのに、後門から狼を呼ぶもの」として反対し、外国奉行を辞任した。



▲ビリレフ 『半井桃水と樋口一葉と日露戦争の時代』友納徹著より

▼明治以後の史家は「小栗は成果を挙げられず、江戸へ戻った」としているが、大局に着眼する小栗は「艦長は命じられて来ているだけだから、日本の申し入れ程度で退去するはずがない。もっと上部からの政治交渉が必要」と考えて対馬での交渉に見切りをつけたに過ぎない。